

# 日本文化にはもともと「救道」の精神がある



玄 秀盛

公益社団法人  
日本駆け込み寺代表

「日本駆け込み寺」を開設したのは02年。早いもので今年12年目になる。駆け込み寺というスタンスでDV、ストーカー、家出、自殺、多重債務、家庭内暴力などさまざまな相談にのってきた。その数は2万件以上になる。

開設する以前から、DV防止法やストーカー規制法はあった。その後、何度か法改正も行われた。しかし、人を救うためには、その法律をいかに運用するか、いかに適用するかが重要だ。人を生かすのも見殺しにするのも、人が法律という道具をいかに駆使して運用(適用)するかにかかると。法律によって制約が生じてはならない。人に明かりやぬくもりを与える火は、その使い方と、人の命や全財産を奪い取ってしまつこともある。法律は火と同じである。駆け込み寺に来る相談者の多くは、暴力やストーカーの被害者。例えばDVの相談を受けた

## 「すぐに動く」悩み相談機関を

ときには、その加害者を呼び出す。相談者(被害者)だけではなく、相手方(加害者)の話も聞くことも大切にする。加害者としっかり向き合い、サポートすることが解決につながる。

加害者・被害者を問わずサポートするためには、まず全国に相談員を増やすこと。問題を抱える人々の身近なところに相談員がいれば、早いうちに相談できる。傷は浅ければ浅いほど回復も早いし、傷痕も残らない。相談者が自分の問題を解決したのちに相談員になる、というケースも増えるだろう。

現在、駆け込み寺は、相談料を取っていない。相談というものは、無料であるべきだ。悲しみや不幸を金銭に換算している場合もあるが、お金ではないと思う。「10万円だったら助けるが、1000円では助けない」はおかしい。この方針はこれからも続ける。

そして、相談というものは、時を選ばない。生き物でもあるし、ナマものでもあるから、即断・即決が必要。だから「24時間・年中無休」の相談受け付けを目指している。年中無休は、昨年のうちに達成できた。今年は体制を強化し、24時間受け付けを目指している。

昨年7月、駆け込み寺は、仙台の国分町に初の支部(国分町駆け込み寺)を開設した。東北一の歓楽街を拠点に、震災によって打ち砕かれた人間関係やコミュニティの「心の復興」を支えている。また、10月に兵庫県三木市に初の

連絡所(アンテナステーション)を開設(現在20カ所)。連絡所はこれからも増やしていく計画で、全国3000カ所を目指している。

\*

今年は、ひとつの提案として、いじめ問題に取り組んでいきたい。この社会問題はますます陰湿化・深刻化しており、解決するためには、被害者側でもなく、加害者側でもなく、学校側でもない第三者機関が必要だ。それも「すぐに動く機関」でなければならない。

昨年、日本駆け込み寺は公益社団法人になった。いじめ問題の第三者機関になることもできる。もし実現すれば、教育関係者、学校関係者、いじめた子、いじめられた子を問わず、第三者として、駆け込み寺ならではのスタンスで対応できる。ぜひ活用してほしいと思う。

最後に、今年、駆け込み寺は、人を救う道「救道」を究めていきたい。突き詰めて考えると、日本の究極のスタイルは、武道や茶道・華道など、日本人ならではの精神性を重視し、物質やお金ではない世界を究めていくことだ。そこには、人としての矜持や思いやり、繊細な感性に支えられた文化的要素がある。

救道を究める。日本駆け込み寺は、これを指針とする。

げん・ひでもり 20〜40代前半は「金もつけに心血を注いでいた」(筆者談)。だが、白痴ウイルスH1N1の感染判明を機に過去を捨て、02年「歌舞伎町駆け込み寺」を設立。

「これが言いたい」は毎週木曜日に掲載します